

フランソワ・ラブレーの馬上曲芸の エピソードに見るフランス16世紀の社会変動

石橋正孝

本稿では、フランス16世紀前半のフランソワ・ラブレーの作品『ガルガンチュア物語』におけるジムナストという登場人物の馬上曲芸の描写の歴史的背景を考察し、近代の入り口におけるフランスの社会構造の変化を読み解いていく。

ラブレーの『ガルガンチュア物語¹』は、1532年の『パンタグリユエル物語』の成功を受けて、パンタグリユエルの父親の物語として1534年に出版された。『パンタグリユエル物語』同様、巨人ガルガンチュアのグロテスク・リアリズムに彩られた成長物語の中に、ラブレーの人文主義の主張が全編を通じて謎解きのような形でちりばめられている²。物語の後半のピクロコル王の戦争は、ピクロコル王の国のパン売りたち (les fouaciers) とガルガンチュアの父であるグラングジエの王国の羊飼いたちとの間の小競り合いに端を発し、ピクロコル王が激怒して戦争を仕掛けてくる。

「(彼らの被害を聞くと) ピクロコル王は忽ちに激怒し、なぜ、どのようにしてこの争いが起こったのかをより一層 (= sans outre) 調べようともせず、その全領土にわたって直属の臣および陪臣を招集した³。

ここにさりげなく挿入されている「sans outre⁴」が、フランソワ1世と争ったカール5世の好んだ銘句の「plus outre」の否定形であり、カール5世がピクロコル王のモデルであることがラブレー固有の権威格下げの笑いの中に示さ

れる⁵。ピクロコル王の軍は、ガルガンチュアの父親であるグラングジエの国に攻め入り、グラングジエはパリに滞在していたガルガンチュア一行を急いで呼び寄せるが、その過程で、ガルガンチュアに帯同していたジムナストは敵軍と遭遇し、敵軍を前に突然馬上曲芸を始める。

そして、全力で軽やかに右側に回転し、前と同じような跳ね方をした。続いて馬の鞍の前に右手の親指をかけて全身を持ち上げ、親指の筋肉と神経のみで身体を支えながら身体全体を中に浮かせると、そのまま三回続けて回転した。四回転目に、どこにも触れずに身体を反転させ、今度は手を変えて左の親指で馬の両耳の間で全身を支えて持ち上げた。そしてそのままの恰好で風車のように回転し、それから、右手の手のひらで鞍の中央をぱんと叩いて反動をつけて、貴婦人方のなさるような形に馬の尻へ腰をおろした⁶。」

このように、ジムナストの馬上曲芸の描写がひたすら続いていくが、その動作の連続の最後には、敵はジムナストの動作の奇怪さに悪魔が乗り移っているものと思いきわ怖から混乱に陥る。そこをジムナストが一気に攻勢に転じ敵の軍勢を倒して35章は終わる。

この後、ピクロコル軍との攻城戦にガルガンチュア軍が勝利を収め、戦場で活躍したジャン修道士への功労賞としてのテレームの僧院に話に移り、物語は終結する。

1532年の『パンタグリユエル物語』においては、パンタグリユエルの軍とディプソード軍との戦いはルー・ガルーとのパンタグリユエルの巨人同士の一騎打ちにパンタグリユエルが勝利して終わるという巨人冒険譚のファンタジーの枠組みの中での戦争であったが、2年後の『ガルガンチュア物語』においては、ガルガンチュアの巨人という特性は影を潜め、ピクロコル軍とガルガンチュア軍の攻城戦においてはそれまでの荒唐無稽な描写と異なる写実的な戦闘描写が取り入れられる。ジムナストの馬上曲芸の描写は、その後続く軍事描写とは対照をなしており、本エピソードへの評価を難しくしている。

ラブレ研究においては、こうした身振りの描写がひたすら続く特異なエピソード

ソードが三つあるので、三部作のようなか形で評価されることが多い。作品の年代順に並べると、『第二の書パンタグリユエル（1532）』のトマストとパニユルジュの身振りによる神学論争⁷、この『第一の書ガルガンチュア（1534）』のジムナストの馬上曲芸、そして『第三の書（1546）』におけるパニユルジュと聾啞のナズドカブルによる、パニユルジュの結婚占いの身振りでのやりとりである。

これらのエピソードはいずれも、膨大な身振り・身体描写の連続に対して、個々の身振りの持つはずの意味が説明されることがなく、登場人物の個人名も身体描写の羅列の中に埋もれてしまい、とりわけ身振りによる対話を前提とするトマスト、ナズドカブルのエピソードでは、意味を奪われた記号の連続の中に実存的な不気味な肉体が浮かび上がってくる。

こうした無意味の連続になりかねない描写に対して、ラブレーは読者が読み続けられるエピソードとして成立させるための作家としての技巧をこらす。エピソード内にちりばめられた様々な文化的・政治的・宗教的・社会的な要素への言及から、また登場人物のそれぞれの身振りへの反応を描くことで、個々には意味を与えられていない身振りにあたかもそれら政治的・文化的、そして記号的意味が成立しているかのように読者に思わせることで、無意味の直前のところで身振り描写の連続をエピソードとして成立させており、まさに文学言語としての記号への極限の挑戦として捉えることができるだろう。

それはすなわち、もともと記号としての言語のシニフィアン・シニフィエ・レフェランの三要素のうちで、虚構作品としての文学においては指示対象であるレフェランが奪われているわけだが、身振りの意味を与えられない身振り描写の連続というのは、レフェランとシニフィエを奪われた純粋なシニフィアンとしての身体をさらに言語化して文学言語として成り立たせるという、まさに二重・三重に、記号の成立要素をそぎ落としていきながら、どこまで虚構文学言語として、記号として成立しうるかというぎりぎりのラブレーの挑戦をみることができる。

一方で、これら二つの身振りによる「対話」のエピソードに対して、ジムナ

ストの身振りの描写は、文学言語の記号的挑戦という意味での難易度はかなり下がってくる。登場人物の身振りによる対話と異なり、ジムナスト一人の動作の連続は、それ自体に記号としての意味を付与されていない乗馬曲芸であり、ラブレの作品の研究対象として捉える場合にも、「三つの特異な身振りのエピソード」の一つとして言及されることはあっても⁸、考察の中心となるのはそれ以外の二つ、トマストのエピソードとナズドカブルのエピソードであり、それらに比べて平易かつ軽いものという付随的言及がなされるにとどまり、この馬上曲芸のエピソードが単独で考察の対象として扱われることは皆無であった⁹。

本稿では、このジムナストの馬上曲芸のエピソードに対して、記号論的議論から切り離して、その他二つの身振り対話のエピソードとは別の独立したエピソードとして、馬術文化の歴史的背景を考察し、当エピソードの文学的意義の再評価を試みる¹⁰。

戦闘技術から騎士道文化へ

「ひとたび馬に乗れば、自ら降りようとはしない。なぜなら、馬上でこそ、健康であれ病気であれ、私は最も自分らしくいられるのだ¹¹。」

16世紀後半を代表する思想家のモンテーニュのこの証言の中で、とりわけ馬上でこそ自己を実現できるという強い主張は、貴族階級に属する精神にとって如何に馬が重要な存在かを示している。騎士 = chevalier, 騎士道 = chevalerie という言葉が示す通り、騎士とは馬 = cheval の上にいる存在なのである。N. ル・ルーが指摘するように、「完璧な乗馬術は騎士にとって最も重要な務めであり、武器の扱い以上に重要とされていた¹²」のであり、16世紀における馬術は、平民と区別される貴族のアイデンティティーの中核をなしていたのである。

この貴族階級の文化の馬術との強い結び付きの背景には、戦争と狩猟におけ

る馬の重要性が挙げられる。本稿では前者の戦争における貴族階級の馬術の発展と変遷について概観することで¹³、写実的とも思えるピクロコル軍との戦闘描写の中でなぜ35章に馬上曲芸の描写が置かれているのか、時系列の中で考察していく。

1337～1453百年戦争

西ヨーロッパの中世から16世紀初頭まで、戦場でのフランスにおける中心的戦術ユニットの主軸を構成したのは重騎士（= chevalier）であった。その戦術ユニットとしての有効性は、14世紀から15世紀にかけて頂点にあり、重騎士は主に100年戦争（1337年～1453年）でその戦術的価値を発揮してきた¹⁴。もともと、フランス王家の内紛ともいべき100年戦争においては、フランス国内は当時の封建諸侯たちがイギリス・プランタジネット側とフランス・ヴァロワ側に分かれて、フランス全土を巻き込んだ内戦の状態であったが、スコットランドとの戦争で長弓隊と歩兵隊の組み合わせ戦術が完成を見たイギリス軍は、長弓隊によって距離をとる戦術を大陸に持ち込んだ。これに対してフランス伝統の重騎士軍団も、15世紀を通じて進化した鑄造技術による甲冑の軽量・強化により対応した。

当時のフランス重騎士の1ユニットは馬・騎士それぞれが甲冑に覆われた重騎士一騎につき追従する数名の従者で構成され¹⁵、重騎士隊が敵陣営に突撃して敵集団の陣形を破壊した後に従者の軽騎兵・歩兵たちが続き、陣形を崩した敵の槍隊や落馬した騎士に襲い掛かるという戦術が中心であった¹⁶。このように自らが重戦車と化して突撃していくフランス騎士軍団の戦術を維持するためには、高度な訓練と莫大な費用を必要とした。まずは馬・厩舎の確保・所有・維持、さらに甲冑や武具に莫大な費用がかかり、その規模はそのまま貴族の地位に直結した¹⁷。

また、中世初期までは馬上からの投げ槍としても機能していた長槍が、11世紀以降突撃専用の戦術に進化していく¹⁸と、馬上で重い甲冑に身を固めながら、6メートルに及ぶ長槍を脇に固定して、先端の目的がぶれないように突撃して

いくには極めて高い練度が必要とされた。従って、貴族の日常においてはこうした馬上操縦技術の絶え間ない訓練を欠かすことはできなかった。

このように、騎士という当時最強の戦闘ユニットの維持は、まさに特権階級としての封建貴族にのみ許されたものであり、王が戦争に際して封建諸侯に依頼したのは、その騎士としての軍事力であり、この軍事的優位性が封建貴族の封土支配の正当性を担っていたのである¹⁹。

1453年～1492年：近代西ヨーロッパの成立

1453年というのは、オスマン帝国により東ローマ帝国が滅ぼされ、イスラムの壁に阻まれた西洋キリスト教諸国が大西洋を越えて西への拡大を進める契機となった年である。同時にこの年はフランスにとっては100年戦争の終了と以降の国内の安定・中央集権化の出発点としての重要な歴史の目印となる年である。

以降40年をかけてフランスの国内統一が進み、最後の巨大封建領主であるブルゴーニュ公国がルイ11世により1488年に制圧され、1491年にシャルル8世がアンヌ・ドゥ・ブルターニュとの婚姻でブルターニュを併合してフランスは国内統一を完成する。イベリア半島においては翌1492年にレコンキスタが完了し、イギリス、フランス、スペイン、神聖ローマ帝国を軸とした同一文化圏が構成されることになる。

1494年のシャルル8世によるイタリア戦争は、まさにこうした新秩序が完成したこととフランスが中央集権を成し遂げたことが背景にある。東方をイスラムに阻まれたことにより、スペイン・ポルトガルは大西洋に目を向け、フランスはイタリアに目を向けた。

この15世紀後半は、同時に火器・羅針盤・印刷術の三大発明が普及し、その成果が社会を根本的に変革する下地を準備した時期でもある。この中の火薬の発明が、フランス重騎士を戦術的に無効化することになるわけだがこの火薬の発明を契機に、およそ1450年から1520年くらいまでの70年をかけて、投射機²⁰に代わる火砲²¹と、長弓・弩弓に代わる火縄銃、さらにはマスカット銃への火

器の改良²²が進められていく。

1510～20年代 イタリア戦争における戦術の近代化とフランス騎士の凋落

このように1510年代から、イタリア戦争の前半戦において、重騎士が戦場における戦術的意義を急速に失いつつある過程は、実際の貴族の言葉にもうかがえる。当時最も有名な騎士といえば、真っ先に騎士バイヤールが挙げられるだろう。本名であるピエール・テライユ²³よりもオーベルニュ地方のバイヤール城の騎士としてその名を知られた騎士バイヤールは、1512年のラヴェンヌの戦いで神聖ローマ帝国軍団と激突する。フランス軍は戦いには勝利するものの、敵歩兵隊と火縄銃隊の攻撃により騎士団に甚大な被害を蒙る²⁴。バイヤールはこのラヴェンヌの戦いで損失について、叔父のグルノーブル司教に宛てた手紙で次のように語っている。

「これらの（敵）歩兵隊は多くの火縄銃を持っていたので、歩兵隊を指揮していたわが軍の騎士たちがそれを見て動揺して退却しようとしたところを、ほぼ全滅させられてしまいました。… 叔父上、我々が王は戦いには勝利しましたが、哀れな騎士たちは大敗北を喫しました。我々が敵軍に追撃を加えていると、ネムール卿は敵歩兵が集まっているのを見て突撃をかけましたが、歩兵の保護がなかったために、その場で命を落としました。…²⁵」

ここでは、フランス重騎士たちが歩兵部隊の指揮官として戦いながらも、敵のスイス傭兵部隊と火縄銃との組み合わせに押され、重騎士が殲滅されていく様が描かれ、その損失が嘆かれている。とり分け、優秀な指揮官であるガストン・ドゥ・フォワを戦いで失ったことを悼み、自らが精神的な「憂鬱 = mélancolie」に侵されていると述べているが、この「憂鬱」は当時の多くの貴族が表明している²⁶。

また、16世紀の軍事史家の代表格ともいべきブレイズ・ドゥ・モンリュックの『コマンテール』の中では、当時の騎士ユニットの指揮官達が戦場でかつての優位を失い、平民の操る火砲の前に倒れる屈辱と苦渋の心境を伝え、

「我々を戦場に連れて行ってください。火砲に殺されるくらいなら、素手の戦いで死ぬ方がましです。²⁷」とすら言わしめる悲壮な覚悟を伝えている。

このように戦術の近代化という点で、ヴァロワ家のフランスが重騎士の栄光を捨てきれずにいる間に、ハプスブルク家は対フランス戦において1520年代にいち早く歩兵と火器の組み合わせによる近代化を成し遂げた。とりわけ、レコンキスタを通して歩兵の近代化を積極的に進めていたスペインのカール1世が、マクシミリアン1世の死後1519年に神聖ローマ帝国の王カール5世となり、神聖ローマ・スペイン連合となって以来、イタリア戦争での戦局は決定的にハプスブルク家に有利となった。

『ガルガンチュア』出版の9年前の1525年のパヴィアの戦いは、フランソワI世がカール5世の捕虜となるフランスの大敗で終わり、イタリア戦争の大きなターニングポイントとなった。また中世以来のフランスの伝統である、練度の高い騎士の突撃に頼る戦術の終焉をも意味した。カール5世の神聖ローマ帝国側が用いた火縄銃と矛槍（= halberde）を用いた歩兵隊の組み合わせは、フランス重騎士を戦場で無力化し、社会における貴族の地位そのものをゆるがせることとなった。

J.-P. マイヤーが指摘するように、とりわけ1520年代の火縄銃の改良・普及が戦局を決め²⁸、社会階級の変革をも促す契機となる。莫大な費用と相当な練度を必要とする重騎士の突撃に対して、引き金をひくだけでの火縄銃は簡単に兵士を養成できるので、小市民が大量に戦力の中心として活躍するようになり、火縄銃と歩兵隊の組み合わせは、中世の騎士道に基づく社会秩序をゆるがす決定的な戦術の革新²⁹をもたらしたのである。

1530年代～ 戦闘ユニットとしての騎士から騎士道文化への変遷

ジムナストの馬上曲芸の身振り描写を含む『ガルガンチュア』が出版された1534年は、こうした戦術革命が完了した直後である。軍事に精通していたラブレールにとっては、『パンタグリユエル』・『ガルガンチュア』執筆時期が戦場の主役が火器と歩兵になる転機にいることを十分理解していたわけだが³⁰、ラブレール

レーの作品と同時代の証人としては、バルタザール・ドゥ・カステイリオーネの『宮廷人』（*le Livre du Courtisan*）が挙げられる。1528年にヴェニスで出版され、1537年にはフランソワ1世の直々の命令でフランス語に翻訳され、その影響は王宮とそこに集まる宮廷貴族に加えて、貴族の生活への強いあこがれを持つ上昇志向のブルジョワ階級にまで広がり、大きな成功を収めることになる³¹。この『宮廷人』の中で示そうとしている「諸公の宮廷に仕える貴人にもっともふさわしい宮廷人らしさの姿³²」には、いわゆる「gentilhomme」の身に着けるべき礼儀作法が求められ、封建貴族の間では戦場での技術習得のための様々な修練もその貴族の素養として求められている。

「そのほか平和なときにも種々な競技などで武器が用いられ、並いる観衆や婦人や諸公のまえで貴族たちが公開の試合にのぞむことがあります。それゆえにわが宮廷人は、あらゆる馬術を身に着けた完璧な騎士であることが望ましく、また馬や乗馬に関する知識を備えているばかりではなく、あらゆる点で人より一歩先に出るために熱意と勤勉を忘れるべきではありません。…重装乗馬やとくにじゃじゃ馬をたくみに乗りこなすことや槍試合や一騎打ちには、イタリア人はもっぱら定評がありますから、わが宮廷人は、イタリア人のなかでもすぐれた一人となるべきです。…そのほかにもまだ沢山肉体の鍛錬があります。直接に武器のみに依存するわけではありませんが、武器の場合と非常に似ており、男性的な活躍が大いに要求されます。…また跳躍乗馬も大いに推奨したいものです³³。」

ここでは「あらゆる馬術を身に着けた完璧な騎士」としての戦闘技術が発揮される場が、「公開の試合」、「槍試合や一騎打ち」とされており、1528年の時点で、すでに重騎士が戦場での役割を終えていることが前提となっている。「宮廷人らしさ」に求められる資質は、戦士としての封建貴族に求められる資質からの変容を見せており、J. ウルマンが指摘するように³⁴、騎士の乗馬技術は戦争準備という目的を離れ、自己目的化していく瞬間を我々はこの言葉の中に見出すことができるだろう。

続いて、『宮廷人』のフランス語版出版の10年後の1548年には、R. フルク

ヴォー³⁵の『戦場での心得』が出版される。三部に分かれた戦争技術についての軍事教本とも呼ぶべき本の中で、フルクヴォーは徴兵から軍の規律、武具の製造に関わる職種から歩兵の武装、火縄銃・弩弓兵の武装などから、火器を伴う新戦術とそれに必要な隊列の作り方などについて詳細に書きながら、フランス軍の編成について、スイス兵などと比較しながら以下のように述べている。

「彼ら（スイス歩兵）は、ノヴァールやマリニャンで示したように、実に勇敢で1万5千から2万程の軍勢で我が騎士軍団に襲い掛かり、いずれにおいても戦果を挙げた。彼らの示した模範的勇敢さは彼らの武装が大きく寄与している。実際、シャルル8世の長旅（＝イタリア戦争）以降、その他の国々は彼らスイス兵の戦術を模倣し、それによってドイツ・スペインの軍隊は今日の名声を築いているのだ。それほどに、彼らはスイス兵の戦術を模倣することに貪欲であったが、それに対して我々は大きく後れをとっている。わが軍が彼らに追いつくには、これまで怠ってきた軍の編成の改革に着手し、スペイン・ドイツにどの点でも劣らぬようにしなければならない。そのために、彼らの部隊編成と同様の部隊を我々も獲得しなければならない³⁶。」

1510年代から20年代にかけての戦場でのフランス重騎士隊の決定的敗北のあとで、フルクヴォーは改めてフランス軍の近代化・再編成の必要について強調している。フランス騎士の最期の勝利であると同時に実質的にはスイス兵に甚大な被害を被った1515年のマリニャンの戦いへの言及にも認められるように、火器の援護を持つようになった歩兵隊に伝統的な騎士の突撃戦術が通用しなくなったこと、すなわち近代化＝フランス騎士不要論が明白な事実としてこの主張全体の骨子をつくっている。

外交官のデュ・ベレー卿に従ってイタリアを何度も往復したラブレーと同様、フルクヴォーも兵士として、また外交官として特に近代化されたスペイン軍を直接見て軍事に精通していた。フランス軍がスペイン・神聖ローマ帝国に軍隊の近代化で遅れをとっていることがはっきりと危機感として自覚されており、その対策としての近代化は歩兵隊の整備であり、フランス騎士はそこではまっ

たく存在すら言及されていない。

同時にこの一節で注目すべきは、軍の近代化の必要性が繰り返し強調されながらも、近代化の対象が歩兵隊であること、そして近代化の障害となっているのが重騎士隊である点に可能な限り直接的に触れないようにしている点である。スイス兵を模倣し、ドイツ・スペインに追いつかなければならないと強調しながらも、模倣されるべき「彼ら (ils)」と、模倣すべき「部隊編成 (cet ordre)」という言葉が繰り返され、導入すべき歩兵隊も、入れ替わりで退役させるべき重騎士隊も名指しされることが極力避けられている。

フルクヴォーの記述に見られるこうした騎士への配慮から伝わってくるのは、貴族階級の喪失感の大きさと、貴族階級の軍事上の依然として大きな影響力である。また、この本の出版が1547年のフランソワ1世の死の翌年の1548年ということも、歴史の偶然というよりは、必然的な関連性を推測させるものであるといえよう。フランソワ1世は中央集権を成し遂げたフランス最初の君主制の王であると同時に実際の戦場で騎士として戦った最後のフランス王であり、その死が象徴的に騎士の時代の終焉を告げることで、以降フランス騎士の戦術的有效性を否定することが社会的にタブーではなくなったということなのかもしれない。

いずれにせよ、そうした貴族の喪失感と騎士の栄光への郷愁は、騎士という戦術ユニットを騎士道という文化的遺跡として存続させる方向に駆り立てていくことになり、貴族の祝宴の場での馬上試合として維持されるが、重騎士の突撃戦術を用いた実践は、長くは続かない。フランソワ1世の死後、神聖ローマ帝国とイタリアに対する覇権をめぐる難局をしのいだ息子のアンリ2世が1559年、カトー・カンブレジス条約の締結でイタリア戦争を終結させるが、そのアンリ2世はその条約締結の祝宴の場での馬上槍試合で命を落とすことになる。

こうして、イタリア戦争の終結と、騎士道の終焉が皮肉な形で重なることになるのだが、フランス国外での戦争が終わると、国内では続けて1560年以降宗教戦争が本格化する。フランス国内全体が暗い内戦の雰囲気に入れられ、フランス騎士道の唯一の生き残りの場としての貴族の祝祭の機会すらなくなっていき、

1560年以降には伝統的な重騎士の姿は事実上消えることになる。

とはいえ、こうして実践・祝祭両方の場から姿を消したとはいえ、過去の騎士道の栄光は文化的・精神的支柱として社会のあらゆる階級に影響を及ぼし続けることになる。また経済的・社会的にも、実際重騎士を頂点とする軍事・社会ヒエラルキーが一瞬で姿を消すわけではない。技術革新がもたらす社会変動の際に、新しい秩序で必要とされる職業に対して古い秩序の職業・雇用が簡単に自らの地位を明け渡すことはない。軍隊を支える多くの職種が社会には存在し、それまでの重騎士を頂点とする軍事ロジスティクスにおいては武具・馬・従者を含めて、多くの職業と人が関わっており、彼らが騎士の凋落と同時に突如その職を失うことになってしまうのかといえば、それこそ文化として騎士道を存続させることで、自らの生活を守ろうとする原動力が社会のあらゆる階級に存在したと考えられるだろう。

1564年～ 技術書の時代³⁷

そうした社会的要請も相俟って、戦術ユニットとしての騎士は、騎士道文化として生き残る道を模索することになる。B. カステイリオーネの『宮廷人』に示された通り、馬術・馬上跳躍は宮廷貴族の素養として要求されるようになり、16世紀後半以降に、馬術に関するフランス語³⁸での技術書の出版が続く。1564年 C. フィアッチの『馬をいかにして操り、馬勒をつけ、蹄鉄を打つかについての指南書』³⁹、1599年の A. チュッカロの『馬上曲芸に関する三つの対話編』⁴⁰、そして1616年のウォールハウゼンの『騎士道の技』⁴¹などが挙げられる。

宗教戦争が始まってすぐに出版された C. フィアッチの著作は、イタリア人でありながらフランス語で書かれており、内容はタイトルの通り、馬の世話と病に関する詳細な技術書であるが、冒頭の読者への言葉の中では B. カステイリオーネ同様、貴族の素養としての馬術と馬に関する知識の重要性を強調している⁴²。

また『馬上曲芸に関する三つの対話編』を著した A. チュッカロは、フィ

アッチ同様にイタリア人でありながらフランス語でこの書物を書いた。ハプスブルク家のマクシミリアン2世（在位1563-1572）にジムナスト＝体育教師として仕えたのち、在位がほぼ同時期のヴァロワ家のシャルル9世（在位1561-1574）の宮廷に移り、乗馬跳躍の体育教師として宮廷での地位確保している。同書は、199ページの三つの対話編の中に、87枚の跳躍・馬上曲芸の挿絵が組み込まれて跳躍の解説がなされている。ジムナストの乗馬曲芸を想起させる図1⁴³のような絵柄も、こうしたシンプルな同一の絵が多用されていながら、それぞれに異なる跳躍の説明がなされており、身体動作の細かい技術を視覚的に伝えるものとは言い難い。ただし、動作への解説は詳細にされており、この図1の「卓上での足を揃えての反復前跳び」の技術に関しては以下のように説明されている。

「素早い反復で地上からするこの跳躍は、卓上での動作、身体の戻り、足の動きは前項の跳躍と類似しているが、以下に留意しなければならない。すなわち、一度卓上から地上に着地し、左足が地面を蹴ることを止めると、すぐに右足を後方に蹴り上げ、付け根まで高くあげて足が一直線になるように伸ばす。⁴⁴」



図1 Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

身振り描写の連続という点では、ラブレーのジムナストの身振り描写にきわめて似たものとなっているが、これも詳細ではありながら、この描写から未知の動作を学び取ることは不可能であろう。

またこのチュッカロの著作の対話篇という形に関しては、馬術に限らず当時のイタリア人によってフランスで出版された「指南書 (traités)」は、その多くがキケロ風対話篇の形式をとっており⁴⁵、そこには古代ローマの権威付けの狙いという意図があった。ヴァージニア・コックスが指摘するように⁴⁶、16世紀のフランス・ルネサンスは、古代ギリシア・ローマの文芸復興をその原点としており、イタリア戦争以降フランスに多く流入してフランス社会への定着を目指したイタリア移民はそうした背景を利用して自らの職業に古代の権威づけ⁴⁷をする手法がとられ、チュッカロの著作もその典型と考えることができる⁴⁸。

また、ドイツ人ウォールハウゼンの1616年の『騎士道の技』では、フランス騎士が戦場から事実上退いてから一世紀が経ってから、騎士に求められる馬術についての解説をしている。読者への序文においてウォールハウゼンは、騎士には「精神的な要素と肉体的な要素」の二種類があるとして、書物の目的が後者の伝達のためだとしている。また、騎士の乗馬術の素養はローマ軍に由来するとして、ラテン語を多用し、それをまたフランス語で解説しなおしている。これもチュッカロの著作の対話篇形式と同様に、著作の権威づけの要素としてみなすことができるだろう。本稿では、これらの教本、指南書からの原文への言及を最小限にとどめてあるのも、どの書物にもこうした権威付けの精神論が大きな場を占めており、内容的に注目に値する部分が少ないことを理由としている。

ウォールハウゼンの著作でもう一点、チュッカロの著作と共通しているのは、図表と馬術の動作に解説とそれに付随する図表の簡易さである。これもジムナストの馬上曲芸を想起させるような図⁴⁹の中のN°2, 5, 8などに関して、例えばデッサンN°2に関しては、「いかにして騎士が作法通りに甲冑を身に着けたままで左側から馬に飛び乗り、また飛び降りるか⁵⁰」とだけあり、他のデッサンもすべて同様に簡潔な説明が加えられているのみである。

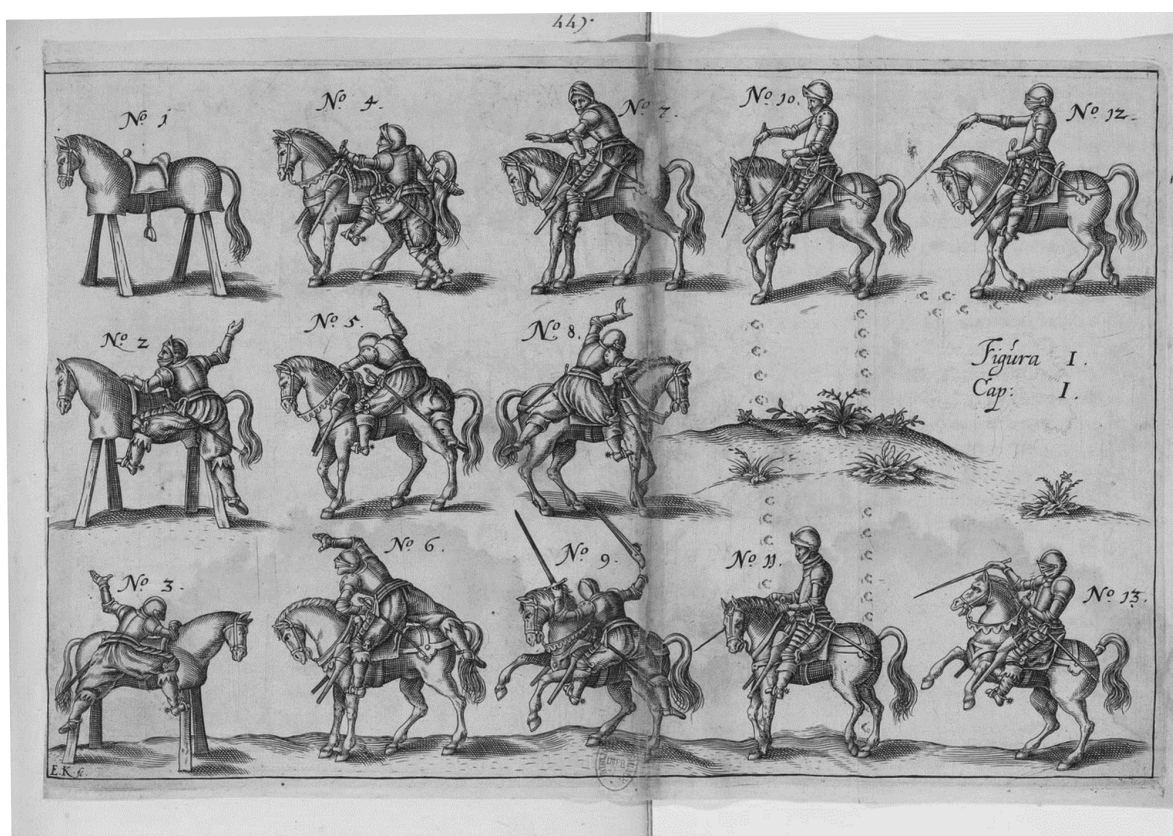


図2 Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

このように、ラブレーの1534年の『ガルガンチュア』以降、実践としての騎士の乗馬術ではなく、騎士道の素養としての馬術に関する文献が複数出版されているが、これらのいわゆる技術書に関して注目すべき点が二つある。一点は、馬術・馬上跳躍の教本でありながら、そのシンプルな図表解説が実際の体技の習得にはとても不十分という点であること、二点目は、著者が外国人、特にイタリア人が多いことが挙げられる。

一点目の教本としての不十分さについては、明白な一つの事実が理由として挙げられる。それは、当時の様々な指南書・教本で扱われた、貴族の素養としての狩猟、ダンス、剣、馬上跳躍などは、本を通しての習得などそもそも不可能であるという点である。いずれもこうした身体運動の習得は、実地の練習を通してのみ伝えることができるのであり、チュッカロなどのシンプルな図説は、そもそも貴族の修練を本来の目的としていないのではないのではないだろうか。これらの教本は、「貴族の素養」を、貴族ではない平民階級に広めることを目

的としていたのではないだろうか。

それ以前には貴族の間で伝えられてきた身体に関わる技術が指南書など必要としなかった点を考えても、印刷術の普及が可能ならしめたこうした指南書の成功は、貴族階級における身体技術の習得などではなく、封建騎士から没落した宮廷貴族階級に代わって勢いをつけてきた新興ブルジョア階級のための「教養としての貴族文化」だったととらえるべきであろう。社会での地位を増す平民の上昇志向は、貴族階級への強い憧れと一体となり、貴族文化を知識として吸収しようとする強い需要があり、これらの指南書・教本がこうした需要に応える形で流行を見せたと考えられるべきである。

とりわけ、N. エリアスが指摘するように⁵¹、フランスの宮廷にはブルジョア知識人階級が「法服貴族」として早くから宮廷に登用されるようになっており、本物の貴族がもつ素養を日常的に目にする機会がありながら、そうした素養の欠如が彼ら真の貴族との文化的階級差別を構築していたのであり、その文化的差異化が、貴族階級とブルジョア階級との階級闘争の場として展開していくことになるのだ。

また、M.-M. フォンテーヌが指摘するように⁵²、当時はこうした軍事教練から派生した身体技術に関しては、イタリア人がフランス人よりも秀でていたという認識が共有されており、イタリア人にとってはこうした著作をフランスで出版することは身体技術に秀でたイタリア人という評価を最大限に利用できたと考えることもできる。そう考えて初めて、これらの指南書・教本に共通してみられる特徴としての権威付け、倫理的・精神的重要性を強調する議論の占める割合の高さと、それに比して実技面での解説の際立つ簡素さとが理解できるかもしれない。

二点目の特徴として、著者に外国人が多い点、とりわけイタリア人が多い点については、そもそもイタリア戦争を契機としたフランスにおけるイタリア移民の多さが背景にある。実際に、16世紀フランスにおける外国人の割合は、イタリア人が突出しており、イタリア戦争を契機としてフランスに多く入ってきたイタリア移民がフランス・ルネサンスの方向性に決定的な影響を与えてきた。

レオナルド・ダ・ヴィンチがその晩年をフランソワ1世の庇護のもとに過ごしたことは有名であるが、ここで気を付けなければならないのは、イタリア文化人といえども、それはレオナルド・ダ・ヴィンチのような高名なものばかりではない。それどころか、多くは無名の移民たちが、政治・経済・文化のあらゆる領域でフランスに流入した。J.S. デュボワが指摘するように⁵³、当時フランスに流入したイタリア移民は数が多すぎて把握することすら不可能なほどであり、その多くは商業都市のリヨンに集まりイタリア人コミュニティを構築していた。

リヨンは当時から現在に至るまでフランス第二の都市として、またフランス経済の中心都市として銀行業務にふさわしく、また定期市の開催が多くの外国人を集めてきたので、外国人移民を受け入れやすい条件が備わっていた⁵⁴。ラブレーは『ガルガンチュア』を出版する2年前の1532年にはリヨンで医師となっており、リヨンの町がラブレーにとって身近なものであったことがわかっており、同じ『ガルガンチュア』の13章にラブレーが忍び込ませたミケランジェロの「レダと白鳥」のパロディ⁵⁵は、当時のリヨンでの経験が反映されている。フランソワ1世の注文で、ミケランジェロの「レダと白鳥」が弟子のミーニによってパリに運ばれる途中の1531年の暮れに、ミーニの一行はリヨンに到着、現地のフィレンツェ国民団に熱狂的な歓迎を受け、結局半年リヨンに留まることになる。この時にリヨンにいたラブレーは、イタリア移民の存在感の大きさを強く感じ取ったことは疑いないだろう。

こうしたイタリア移民のフランスでの定着と活躍は17世紀以降も続き、チュッカロのような身体修練の師範 = maître が宮廷貴族の素養としてのダンス、フェンシング、跳躍などの様々な身体技術の領域で活躍し、モリエールの『町人貴族』の中で揶揄されるほどに、フランス社会での自らの社会的地位の確保・地位向上にしのぎを削ることになる⁵⁶。そうした師範の下に教えを乞いに集まるのは新興ブルジョア階級であり、貴族たちは自らの経済的・軍事的優位が奪われた状況で、文化的優位が自らの階級の優位を守る最後の砦となってくるので、イタリア師範が広める前世紀の貴族文化の大衆化に対して、フラン

ス貴族の文化は宮廷バレエや宮廷管弦楽のように外部の大衆からの可視化を防ぐための内向化、密閉化が進むことになっていくのである。

結論

ジムナストの馬上曲芸の描写は、物語内で必要な意味量を超えた身振り描写が続いていくので、ラブレー研究においてはトマスト、ナズドカブルの二つのエピソードと併せて、三つの身振りのエピソードとして一つに括られて記号論的議論の中で扱われることが多い。しかしながら、ジムナストのエピソードの身振り描写はトマスト、ナズドカブルのものに比べると描写量は相対的に少なく、動作そのものに記号的意味を持たせていない点も含めてあまり議論の主題とされることはなかった。

本稿で示したのは、このジムナストのエピソードを記号論的議論ではなくて貴族の馬術文化の歴史的変遷の中で考察することで、その意義を再評価することであった。1525年のパヴィアの戦いは、フランス軍が敗北を喫し、フランス重騎士が戦場での役割を完全に終えたフランス騎士文化にとっては重要な転換点である。そのわずか9年後の1534年の段階でラブレーが描いたものは、その後のフランス騎士の文化がどのような道をたどるかの近未来を予見している。

『ガルガンチュア』から半世紀以上の後の1598年、アンリ4世のナントの勅令によりフランス国内の内戦が終わり、17世紀の近代絶対王政の時代にさしかかる頃には、中世封建貴族の実践の目的を失った身体技術は、乗馬、フェンシングなどの様々な宮廷貴族の素養に変容し、A. チュッカロの1599年の著作に代表されるように、イタリア移民の師範による身体修練の教本・指南書という社会的流行をもたらし、大衆化の道をたどっていくことになる。チュッカロと同時代のセルバンテスが『ドン・キホーテ』（1605, 1615）で騎士道の終焉を風刺的に描いたのは、滑稽な笑いに貶めることが社会的に許容されるほどに、騎士道文化が世俗化・大衆化されていたからであろう。

一方でラブレーは、セルバンテスの70年以上前に、ジムナストのエピソード

によって「戦闘ユニットとしての騎士」の終焉と、その後の「騎士文化」の変遷をいち早く文学作品の中に刻印していたのである。パヴィアの戦いの9年後、騎士道を時代錯誤として風刺的に描くにはまだ早すぎた時代、それがまだ許容されない社会の中で、写実的ともいえるピクロコル軍との戦いの描写の中で、活躍の場を失ったフランス騎士を登場させる代わりに、その場を騎士道文化の末路というべき馬上曲芸に置き換えたのである。作品の執筆時期があと10年早ければ、このエピソードが書かれることはなかったかもしれない。ラブレーの時代を読む慧眼がより評価されるべきであろう。

- 1 F. Rabelais, *Gargantua* (1534) dans *Rabelais, l'œuvre complète*, (éd. par) M. Huchon, Paris, Gallimard, 1994 dans la collection « Pléiade ».
- 2 ラブレーについての概説書としては、以下参照。M. Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011 ; M. Screech, *Rabelais*, Londres, 1979, traduit en français par Marie-Anne de Kisch, Paris, Gallimard, 1992 ; J. Paris, *Rabelais au futur*, Paris, Editions du Seuil, 1970 ; J. Plattard, *L'œuvre de Rabelais*, Paris, Honoré Champion, 1967 ; F. Rigolot, *Les Langages de Rabelais, Etudes Rabelaisiennes*, t. X, Genève, Droz, 1972
- 3 F. Rabelais, *op.cit.*, pp. 75-76 : « Lequel incontinent entre en courroux furieux, et sans plus oultre se interroguer quoy ne comment, feist crier par son pays ban et arriere ban, et que un chascun sur peine de la hart convint en armes (…) ».
- 4 E. Rosenthal, « Plus Ultra, Non plus Ultra, and the Columnar Device of Emperor Charles V » dans *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 34, Chicago, University of Chicago Press, pp. 204-228, <https://www.journals.uchicago.edu/doi/10.2307/751021>. 参照。
- 5 F. Rabelais, *op.cit.*, note par M. Huchon, p. 1132, Voir aussi, C. Sicard, « Picrochole, au miroir de Charles Quint (2012) », dans *Le Marquetis de Claire Sicard*, <https://clairesicard.hypotheses.org/367>.
- 6 F. Rabelais, *Gargantua* (1534) dans *Rabelais, l'œuvre complète*, (éd. par) M. Huchon, Paris, Gallimard, 1994 dans la collection « Pléiade », ch. XXXV, pp. 98-99 : « Lors par grande force et agilité feist en tournant à dextre la gambade comme davant. Ce fait mist le pouce de la dextre sus l'arçon de la scelle, et leva tout le corps en l'air, se soustenant tout le corps sus le muscle, et nerf dudict pouce : et ainsi se tourna troys foys, à la quatriesme se renversant tout le corps sans à rien toucher se guinda entre les deux aureilles du cheval, soudant tout le corps en l'air sus le pouce de la senestre : et en ceste stat feist le tour du moulinet, puis

frappant du plat de la main dextre sus le meillieu de la selle se donna tel branle qu'ils eassist sus la crope, comme font les damoiselles. »

- 7 拙論「パンタグリユエルにおける身振りのエピソードの解釈」桜文論叢 日本大学法学部紀要106号 pp.1-21 参照。
- 8 M. Jeanneret, *Le défi des signes : Rabelais et la crise de l'interprétation à la Renaissance*, Orléans, Paradigme, 1994. 参照。
- 9 拙論 « La voltige à la Renaissance », 慶應義塾大学フランス文学研究室紀要5号, 2000年, pp. 1-10 においては, フランス・ルネサンス期の身振り文化の文脈で, 馬上曲芸に関する倫理的議論に注目した。本稿では, ジムナストのエピソードの文学的意義の再評価に焦点を当てる。
- 10 現代の体操における鞍馬競技にまで至る歴史的流れの中での16世紀フランスの馬術・馬上運動の考察に関しては, 以下を参照。G. Bonhomme, « Le cheval comme instrument du mouvement humain à la Renaissance » dans *Le Corps à la Renaissance, actes du XXXe colloque de Tours 1987*, J. Céard, M.-M. Fontaine, J.-Cl. Margolin (sous le dir. de), Paris, Amateurs de livres, 1990, pp. 337-349 ; P. Arnaud (sous la direction de) *Le Corps en mouvement –Précurseurs et pionniers de l'éducation physique*, Toulouse, Privat, 1981 ; P. Arnaud, « L'éducation physique » dans *La pédagogie de 1700 à nos jours*, sous la direction de G. Avanzini, Toulouse, Privat, 1981 ; J. Defrance, *l'excellence corporelle : La formation des activités physiques et sportives modernes (1770-1914)*, Rennes, E.R.M.E.S. et A.F.R.A.P.S., 1987 ; J. -L. Flandrin, *Le Sexe et l'Occident. Evolution des attitudes et des comportements*, Paris, Seuil, 1981 ; J. Gleyse (sous la direction de), *L'Éducation physique au XXe siècle : Approches historiques et culturelle*, Paris, Vigot, 1999 ; J. -J. Jusserand, *Les sports et jeux d'exercice dans l'ancienne France*, première édition en 1901, Paris-Genève, Champion-Slatkine, 1986 ; B. Merdrignac, *Le Sport au Moyen Age*, Presse Universitaire de Rennes, 2002 ; C. -M. Prévost, *L'Éducation physique et sportive en France : essai d'anthropologie humaniste*, Paris, PUF, 1991 ; J. Ulmann *De La Gymnastique aux sports modernes, histoire des doctrines de l'éducation physique*, première édition publiée en 1965 chez P.U.F, 3e édition publiée en 1997, Vrin ; J. Ulmann, *La nature et l'éducation : l'idée de nature dans l'éducation physique et dans l'éducation morale*, Paris, Klincksieck, 1987 ; J. Ulmann, *Corps et civilisation : éducation physique, médecine, sport*, Paris, Vrin, 1993.
- 11 Michel de Montaigne, *Les Essais*, éd. Valley-Saulnier, Paris, PUF, 2004, I, 48, p. 289 : « Je ne démonte pas volontiers quand je suis à cheval, car c'est l'assiette en laquelle je me trouve le mieux, et sain et malade. »
- 12 N. LeRoux, *La crépuscule de la chevalerie : Noblesse et Guerre au siècle de la Renaissance*, Ceyzérieu, Champ Vallon, 2015, p. 31 : « La parfaite maîtrise de l'équitation apparaissait comme le premier devoir du chevalier, avant même la

connaissance des armes. »

- 13 D. Bogros, *Les Chevaux de la cavalerie française : de François Ier (1515) à Georges Clemenceau (1918)*, PSR Editions, 2001 ; G. Durosoy, *Saumur : Historique de l'Ecole d'application de l'Saumur : Historique de l'Ecole d'application de l'arme blindée et de la cavalerie*, Charles Lavauzelle-Paris-Limoges, 1978 ; A. Stegmann, "La naissance de l'art équestre en France à la fin du XVIe siècle, colloque, Tours, 1982. 参照。
- 14 クレシー (1364), ポワティエ (1356), アザンクール (1415) でのフランス騎士隊のイギリス長弓兵に対する敗北は、例外的なものであるからこそ強調されるのであり、当時の戦場でのフランス騎士団の有効性を否定するものではない。アレッサンドロ・バルベーロ著、西澤龍生、石黒盛久 訳、『近世ヨーロッパ軍事史』論創社、2014、2020年 p. 10. 参照。
- 15 アレッサンドロ・バルベーロ, *op. cit.*, pp. 9-12.
- 16 シャルルマーニュ以降の西洋の騎士の戦術の進化については、様々な意見がある。マシュー・ベネット他 著、野下祥子訳 『戦闘技術の歴史2 中世編』創元社、2009、2014年、第二章「騎兵・戦車など」pp. 92- 176 参照。
- 17 N. LeRoux, *op. cit.*, p. 31 : « Posséder de belles montures, c'était affirmer sa prééminence sociale et économique. Les grands seigneurs possédaient des écuries qui pouvaient compter plusieurs dizaines de bêtes. »
- 18 こうした重騎士の進化の背景には、十字軍を通しての西洋の歩兵隊の進化がある。機動性を重視するイスラム軽騎兵隊の突撃を食い止めるために進化した弩弓や長弓との連携をする歩兵隊に対して、機動性を犠牲にしつつもより強い突破力を持たせるために馬・騎士ともに全身を甲冑で防御しての突撃能力を磨いたのがフランス重騎兵である。マシュー・ベネット他, *op. cit.*, pp. 29-47.
- 19 アレッサンドロ・バルベーロ, *op. cit.*, pp. 4-27. 参照。
- 20 アルド・セッティア 著、白幡俊輔 訳、『戦場の中世史』、八坂書房、2019、2020年、pp. 172-193. 参照。
- 21 クリステン・ヨルゲンセン他 著、竹内 喜・徳永優子訳 『戦闘技術の歴史3 近世編』創元社、2010、2017、pp. 248-262. 参照。
- 22 アレッサンドロ・バルベーロ著, *op. cit.*, pp. 40-44. 参照。
- 23 Pierre Terrail de Bayard に関しては、以下参照。Jacques de Mailles, *La très joyeuse, plaisante et récréative histoire du gentil seigneur de Bayard composé par le Loyal Serviteur*, éd. J. Roman, Paris, 1878.
- 24 クリステン・ヨルゲンセン, *op.cit.*, 第二章「騎兵・戦車など」pp. 17-22.
- 25 Jacques de Mailles, *op.cit.*, p. 434 : « Leursdits gens de pied avoient tant d'arquebutes que quand ce vint à l'aborder ilz tuèrent quasi tous nos capitaines de gens de pied en voye d'esbranler et tourner le dos. Monsieur, si le Roy a gagné la bataille, je vous jure que les pauvres gentilhommes l'ont bien perdu ».
- 26 バイヤール同様に騎士の鑑として賞賛されていたルイ II 世（ルイ 2 世ドゥ・ラ・ト

- レモイユ) に関して, 以下参照。Jean d'Auton, *Chroniques de Louis II*, éd. R. Maulde de La Clavière, Paris, 1889-1893, 4 vol., t. III, p. 306 : « Presque tous les capitaines principaulx moururent à leur retour, les ungs de dueil de leur perte, les autres de merencolye de leur deffortune, les autres de peur de la malveillance du Roy et les autres de mallady et de lasseté. »
- 27 Blaise de Monluc, *Commentaires 1521-1576*, éd. P. Courteault, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », p.158 : « Menez nous au combat, monsieur ; il nous vaut mieux mourir main à main que d'estre tuez à coups d'artillerie. »
- 28 J.-P. Mayer, *Pavie, 1525 : l'Italie joue son destin pour deux siècles*, Le Mans : Cénomane, 1998, pp. 36-37.
- 29 J.-M. Sallamann, « L'évolution des techniques de guerre pendant les guerres d'Italie (1494-1530) » dans *Passer les Monts ; Français en Italie-l'Italie en France (1494-1525)*, J. Balsamo (éd. par), Xe colloque de la Société française d'étude du Seizième Siècle, Paris, Honoré Champion, 1998, pp. 59-81.
- 30 拙論「フランソワ・ラブレーの作品に見る近代軍事革命」桜文論叢 日本大学法学部紀要101号 pp. 1-23. 参照。
- 31 Voir A. Jouanna, *La France de la Renaissance*, Paris, Perrin, 2009, p. 154.
- 32 B. カステイリオーネ, 「カステイリオーネ宮廷人」, 清水純一, 岩倉具忠, 天野恵訳, 東海大学出版会, 1987年, p. 19. フランス語訳に関しては, B. Castiglione, *Le Livre du Courtisan*, Livre Premier, XVII, édition présentée et traduite de l'italien par Alain Pons, d'après la version de Gabriel Chappuis (1580), Flammarion, 1991.
- 33 *Idem.*, pp. 79-81.
- 34 J. Ulmann, *De la gymnastique aux sports modernes, histoire des doctrines de l'éducation physique*, Paris, 1997, p. 152 : « Les exercices, les jeux cessent d'être préparatoires à la guerre. Mais ils restent identiques, trouvant seulement davantage leur fin en eux-mêmes. »
- 35 Raymond de Fourquevaux, *Instructions sur le fait de la guerre*, Paris, Michel Vascosan, 1548, éd. par G. Dickinson, 1954.
- 36 *Idem.*, p. 13 : « ilz ont prinse telle audace, que XV ou XX mil hommes des leurs oseroient bien entreprendre sur tout un Monde de gens de cheval, comme ilz monstrerent a Novare, & a Marignan : combien qu'il leur print mieulx de l'une bataille que de l'autre. Les exemples de la vertu que ces gens ont monstree avoir au fait des armes a pied, font cause que depuis le voyage du Roy Charles VIII les autres nations les ont imitez, mesmement les Allemans & Espagnolz, lesquels font montez en la reputation que lon les tien aujourd'hui : pour autant qu'ilz ont voulu imiter l'ordre que lesdictes Suisses gardent, & nous finalement : mais c'est de si loing, que nous quant a l'ordre, ne pourrions jamais estre leurs pareilz, si ne faisons valoir ceste ordonnance autrement parmy nous que nous n'avons fait jusques a

present. tant y a aussi qu'ilz ne nous scauroient avancer de nul autre point. Il nous fault donc travailler d'acquérir cest ordre icy ».

- 37 15世紀後半、宮廷貴族の素養としての軍事教練、宮廷ダンスなど様々な身体技術に関しての技術書が出版される。とりわけ、1569年のメルキュリアリスの『Arte Gymnasca』は、当時の身体修練の起源を古代ギリシアに求め、軍事教練を現代のスポーツにつながるものに転換させる重要な著作である。本稿は騎士の乗馬技術に限定して議論を進めていく。J. Defrance, *l'excellence corporelle : La formation des activités physiques et sportives modernes (1770-1914)*, Rennes, E.R.M.E.S. et A.F.R.A.P.S., 1987., p. 20 参照。
- 38 (Cf.) William Stokes, *The Vaulting Master : Or the Art of Vaulting reduced to a method comprized under certaines Rules*, Oxford, 1641, 1652.
- 39 Cesare Fiaschi, *Traité de la manière de bien embrider, manier et ferrer les chevaux : avec les figures des mors de bride, tours et maniemens, et fers qui y sont propres*, Paris, Carles Perier, 1564.
- 40 Archange Tuccaro, *Trois dialogues de l'exercice de sauter, et voltiger en l'air. Avec les figures qui servent à la parfaite demonstration & intelligence dudict Art*, Paris, Claude de Monstre'œil, 1599.
- 41 Johann Jacobi Von Wallhausen, *Art de cheualerie*, Francfort, Paul Jacques, 1616.
- 42 Fiaschi, *op. cit.*, p. aii r° .
- 43 A. Tuccaro, *op.cit.*, p. cc iii.
- 44 *Idem.*, p. 151 r° : « Le saut en avant à pieds joints de course à la table » : La course qu'on prend par terre pour ce saut avec le temps eslancé & le mouvement sur la table, & le retour du corps, & des pieds sera semblable au precedent, prenant garde qu'estant tout le corps retrouvé vers la terre, ayant le pied fenestre finy la batture, le dextre avec une prompte vistesse se jettera en arrière levant la partie supérieure en l'air, comme par droicte ligne ».
- 45 E. Kushner, *Le dialogue à la Renaissance : Histoire et poétique*, Genève, Droz, 2004. 参照。
- 46 V. Cox, *The Renaissance Dialogue. Literary dialogue in its social and political contexts, Castiglione to Galileo*, London, Cambrige University Press, 1992, p. 26: « Reading the courtly literature of the Cinqujecento is a curiously sociable experience: it is scarcely possible to turn a page without encountering the familiar names of poets, princes and *donne di palazzo*, whom we have met in the last poem or dialogue, and the one before that. Any genre -even the most improbable ones -offers opportunities for this kind of literary socializing. (...) However, (...) certain forms, like the volume of letters of the Ciceronian dialogue, were particularly suited to this task (...) The *cornice* of a Ciceronian dialogue is a sort of window-display of Italian elite society, a freeze-frame of the national cultural identity in

fieri. »

- 47 Voir A. Cole, (trad. par) D. Collins, *La Renaissance dans les cours italiennes*, Paris, Flammarion, 1997, 2008, p. 8. ヨーロッパにおける「ルネサンス」と呼ばれる大きな文化運動がイタリアから始まったことの必然は、イタリアという国の持つ文化的矜持と政治的不遇から理解する必要がある。5世紀のローマ帝国滅亡以来、イタリアは複数の都市国家に分断化されたまま、フランス、スペイン、神聖ローマ帝国という自らが征服・支配した国々の政治的・文化的・軍事的優位に運命をゆだねることとなった。
- 48 A. チュッカロの対話篇は、その10年前に出版された T. アルボーのオルケソグラフィというダンスの指南書への反論の形をとっている。(Cf.) Thoinot Arbeau (l'anagramme de Jehan Tabourot), *L'Orchésographie*, Langres, 1589. 16世紀後半には、「ダンス論争」と呼ばれる文壇上の論争があり、貴族の素養として求められる身体技術として、騎士の戦士としての身体技術と貴族としての身体技術のイデオロギー対立の様相を示している。拙論 « Querelle de la danse : Histoire panoramique du mouvement corporel » 慶応義塾大学フランス文学研究室紀要「*Cahiers d'études françaises*」5号, 2000年, pp. 12-25. 参照。
- 49 J. J. Von Wallhausen, *op.cit.*, p. 447.
- 50 *Idem.*, p. 449 : « Comment le chevlaier s'exerce au monter ou saulter a senestre, tout armé, comme le coustume.
- 51 Voir N. Elias, *La civilisation des mœurs*, trad. de l'allemand par Pierre Kamnitzer, 1973, 1997, p. 57.
- 52 M.-M. Fontaine, *Libertés et savoirs du corps à la Renaissance*, *op. cit.*, p.155, « … sur les champs de bataille comme dans la vie de cour, c'est le gentilhomme français, en compétition sur ce point avec l'espagnol, qui paraît l'emporter en tous exercices corporels et fournir un modèle à toute l'Europe, laissant seulement à l'Italie la réputation d'avoir les maîtres les plus adroits. »
- 53 J.-F. Dubost, *La France italienne*, Paris, Aubier, 1997, p. 14.
- 54 J. Boucher, « Les Italiens à Lyon » dans « *passer les monts* », Paris, Honoré Champion, 1998p.39-46.
- 55 « L'affaire du « torcheceul » : Michel-Ange et l'emblème de la charité », dans *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXI, Genève, Droz, 1988, pp. 213-223.
- 56 拙論 *L'image du corps dans les textes narratifs à la Renaissance (1530-1560)*, thèse de doctorat à l'Université de Paris III, 2013, pp. 171-175. 参照。